はじめに

徒然草は古典文学としてよく知られ、多くの読者を持つ味わい深い作品であるが、作者兼好とは何者なのかと考えてみると、これまで通説とされてきたことも、改めて見直す必要に迫られており、実際のところ、その思想的背景、さらに家系や生国など伝記的なことも含め、よくわからないことが多い。しかし、表現の端々にうかがわれるように、兼好がさまざまな方面の教養を身につけ、下層ながらも公家社会と関係をもち、朝廷の儀礼や法制にも通じていたことは、その内容から明らかである。(1)

もともと、徒然草は兼好没後一〇〇年くらい経って読まれるようになったのであり、それまでは忘れられた存在であった。一五世紀中頃、正徹（一三八一～一四五九）がそこに中世的美意識が濃く表れていると見たように、歌論の世界においてそれが享受されることはあったが、多くの注釈書が生まれるのは近世初頭以降であり、その評価は時代の価値観とともに変遷する。たとえば、早くは立安の『寿命院抄』（一六〇四）で、「兼好得道の大意は、儒釈道の

三を兼備する者」ととらえ、それを現実的な教訓書として読もうと試み、松永貞徳の『慰草』（一六五二）は、一般の人々の生活指針となるように、さらにそれを和らげた解釈を展開して歓迎と流布を得た。以後、しだいに兼好は道念の人から文芸人、さらにはくだけた一面を持つ粋人としても受け取られるようになる。徒然草には、広い視野と柔軟な思考が見られ、それが人々に種々の関心を抱かせてきたといえる。[2]

そもそも、徒然草と兼好についてみていくとき、そこにはさまざまな矛盾を挙げることもできるだろう。しかし、かりにそれが矛盾にみえるとしても、兼好のなかではひとつの動機、根本的な衝動のもとに、自己の「自然」に逆らうことなく表出されたものなのではないかと思われる。そのような矛盾は、ある意味では人間存在そのものに内包されたもので、兼好はそれを自分なりのしかたで示したにすぎず、それこそが兼好の独自性ともなっているといってもよい。[3] 王朝文学から中世文学への流れのなかに徒然草を位置づけようとするとき、徒然草の「つれづれ」は改めて検討すべき重要な概念であり、それと関連して浮かび上がってくるのが「無為」ということである。それはそのまま、兼好にとっての「自然」とはどういうことであったのかということにつながっていく。さしあたって、本書において第一章では「つれづれ」から「無為」への道筋をつける。

さらに、「徒然草と老荘」（第二章）、「徒然草の時代」（第三章）で問題にしたいのは、兼好が「無為」とのかかわりにおいて、老荘の思想をどのように読み、それをいかに自らの思考に生かしていったかということであり、またそれが彼の生きた時代とどう関連するのかということである。「無為」というあり方を深めていくことで自ずと「自然」とは何かがみえてくる。つまり、何が自然であり、何が不自然であるかの自覚が生まれてくる。そこから、兼好にとっての自由な生き方へのヒントも得られるのではないかと思われる。

無為は、一般的には何もしないでいることであり、「無為無策」「無為徒食」といった語が示すとおり、「無為に過ごす」ことや「無為な日常生活」は否定的にとらえられる。しかし、それはまた、あるがままにして作為しないことであり、老荘では「無為自然」として思想の根幹をなす。とはいえそれは、心を無にすることによってものへの執着を断つということではなく、むしろ、心を虚にして万物を迎え入れるという見方である。一方で、仏教の根本を空ととらえることもできるが、それは無為ともつながっている。それはとらわれのないすがたであり、般若の智慧では「智もなく得もなし」といった否定を前提とし、とりたてていうことではないあたりまえのことこそがまさに実相であり、絶対的なことであるとも受けとめられた。したがってまた、「無為」は修行の果てにたどり着くべき菩提のあり方ともなる。

徒然草は無常観の文学ともいわれ、無常という観点から多くのことが語られてきたことも事実であるが、思想的には、仏教以外に儒教・老荘・神道といった、さまざまな側面があり、兼好が生きた当時の複雑な政治情勢や思想状況が背景にある。いわゆる無常ということについても、兼好が自らの人生の過程でどのような問題に直面し、その時代や社会をどうとらえ、それとどう向き合っていたのかといったことから、改めて考え直してみる必要がある。[4] またそのことが、兼好独自のものの見方なり考え方を作り上げるうえでどのように作用しているのか、そして彼がほんらい求めつづけたものとどうかかわるのか、さらにそれが「無為」とどうつながるのかを、「徒然草と無常」（第四章）、「徒然草の「道」」（第五章）で考える。

兼好が、仏教、老荘などをどのように内面化したかについてはわからないことも多いが、「つれづれ」を突き詰めていくなかで、「無為」とかかわり、それを自らの行動に結びつけ、あるいはその生き方につなげていったということは想定しうる。無といい空といっても、中国で仏教が受容された六朝時代において、老荘の無を通じて仏教の空を理解するのが一般的であったとされる。少なくとも、老荘においては精進努力の末に真理を体得するという考えはなかった。ことさらに人為的な努力をするのかしないのかということなら、そういうことをしないのが老荘的な意味での「無為」である。むしろそこでは、自力か他力かという議論をこえたと

ころに、「自然」のほんらいのすがたがあるとみるべきだろう。兼好が「ただ今の一念」を強調するのも、厳しい修行に人を誘っているというよりは、人間にとっての生死を切実に感得することにおいて、だからこそ、いまのこの生を「楽しぶ」ことをめざしている。したがって兼好にとっての「無為」は、むしろ人間自然のぎりぎりのところにねらいをつけ、そのうえに立つ覚悟あってこその「無為」であったともいえる。そこには、兼好にとって「自然」とは何であったかということもまた自ずと表されているのではないかと思われる。

注

（1）小川剛生『兼好法師』（中央公論社、二〇一七）によれば、兼好は同時代史料には断片的にしか現れず、徒然草について史上初めて言及し、自らそれを書写した正徹は、「在俗時の兼好のことを滝口のごとき「侍」ともみなしていた」

（2）川平敏文『兼好法師の虚像』（平凡社、二〇〇六）「南朝忠臣説的な兼好像は『園太暦』偽文に根ざしていた。それを否定する論調が一般的に定着するのは、藤岡作太郎『鎌倉室町時代文学史』（大正四、一九一五）以降であろう」

（3）小林智昭「徒然草の主題と思想」（「國文学」一九七〇、三月号）「「実在は矛盾であり、矛盾が深ければ深いほど真実在である」（西田幾多郎）とするならば、徒然草にみるこの種の矛盾の深さは、作者の自覚の強さとあいまって作品の真実性を強調こそすれ、けっしてその価値をそこなうものではないであろう」

（4）島内裕子『徒然草の内景』（放送大学教育振興会、一九九四）「現代の兼好観・徒然草観も大別して二つある。孤高の文学者による鋭い美意識と深遠な思索の書物としての徒然草観がある一方で、もっと気さくな人生の表裏に通じた人物による日常的で軽い滑稽味を帯びた書物としての徒然草観がある。徒然草自体の中にこれらの両面が含まれているからこそ生じた現象である」「兼好は仏教のみに自己の精神的基礎を置いているわけではなく、老荘思想にもかなり惹かれているし、さらには、儒教的な価値観も持っている。どれか一つに集約することは不可能である」

徒然草のつれづれと無為

―兼好にとって自然とは何か―

目　次

はじめに……i

第一章　徒然草の「つれづれ」……1

一　「つれづれ」とは何か　1

二　「ただひとりある」ことと「つれづれ」　8

三　「つれづれ」から「無為」へ　14

四　「無為」を「楽しぶ」　20

第二章　徒然草と老荘……29

一　「賢愚得失の境」を出る　29

二　自然なあり方を求める　35

三　老荘受容と時代思潮　42

四　「物皆幻化」から見る　47

第三章　徒然草の時代……55
一　「無」の契機　55
二　頼まざる処世　63
三　東国からの視線　69
四　滅びのうちに生まれるもの　75

第四章　徒然草と無常……83
一　死到来の必然性　83
二　諸縁放下と自由　90
三　兼好と仏教諸宗　96
四　無常のとらえ方　106
五　仏道のゆくえ　113

第五章　徒然草の「道」……123
一　人の道　123

二　色好みと道念　132
三　道としての有職　140
四　道を知る　145
五　無為に至る道　153
あとがき……162